
確たるを率ひ紡ぐ者

FORNEUS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

確たるを率ひ紡ぐ者

【Nコード】

N5869V

【作者名】

FORNEUS

【あらすじ】

自称“善良”な人間の殺し屋の男の前に、
突如自称“墮天使”の女が現れる。

退屈凌ぎの為に女は、

男にあらゆる事象の確率が解る能力を与える。

これは、そんな二人の凄惨なる日常である。

Prologue

Side?

今の勝率は45%

アレを使うには早いだろうと判断した僕は、敵の男の四肢を拘束している 絃 に力を込め引っ張る。

| 50、55、60、65、
∴

「こんな糸など、引きちぎってやる!」

男は無理矢理身体を動かし、 絃 の拘束から逃れようとする。

だが、

ギチチ! ギシシ!

「何故だ!?? どうして切れない!??」

男が足搔けば足搔くほどに 絃 は音を上げて食い込み、肉を徐々に切断していく。

― 75、80、85…

僕は、懷から取り出した8挺のナイフを男に向けてダーツのように投擲する。

ドスッ！ドスッ！

「グエッ！？」

投擲したナイフの内1挺は男の喉を貫通して彼から声を奪い、他は彼の身体の要所要所に刺さっていく。

― 95、96、97、98、99

「何だ、呆氣ない」

そろそろアレを使つて良いだろう。

懷から更に拳銃を取り出し

「悲鳴は地獄で上げるがいい！」

引き金を引いた。

音に成らない断末魔と共に

— 100% —

確実な僕の勝利を告げる音が聞こえた…

第壱話 契約？

S i d e ？

朝だ

といつても既に11時を回っているのだが、超夜型生活な僕からするとそれでも早起きだ。

ん？僕は誰かって？

僕はね、魔法使いなんだ…

ハイ、嘘です違います。

ただの“善良”なニンゲンですよ？

そう言うことではなく、名前？

ああ、そついつことですか…

強制ですか？

うゝん…

名前なんて特にないからなあ…

じゃあ、名前ないってことで零ってのはどうですか？

厨二臭い上にありふれ過ぎ？

ドサッ

痛っ！

本が落ちてきたよ…

ン？なにになに…

『F a t e / Z e r o』？

つい最近買った本だなあ…

確か主人公は『衛宮切嗣』だったっけなあ…

んじゃあ、今日から僕の名前は切嗣にしよう

異論は認めん！

ガバッ！

目が覚めた
知らない天井だ…

嘘です知ってます。さっきも夢の中で見ました

アレ？壁際に誰がいる？

「お前、誰？」

「え、何？俺見えんの？恐っ！？」

なんか知らんが黒い翼の生えている謎の生命体♀が、なにくわぬ顔してPUDDING喰ってた

あ！？あのPUDDINGは僕が食す為に買ったのに…

「…おい、お前は誰だ？」

僕は邪気を放ちながら睨み付ける

「そんなに睨むなよ。それに人に名前を聞く時は自分から言つもんだぞ？」

「うるせえ謎の生命体♀！」

「酷っΣまあ別にいいけど…。俺の名前はバラキエル、墮天使だ」

うわぁ… あいつイタいよ

しょうがないから僕は夢の中で決めた名前を口にする

「僕の名前は切嗣だ、堕天使（笑）」

「（笑）ってなんだよ…。まあいいや、これご馳走さん♪」

堕天使（笑）は僕のPUDDINGを喰らい尽くした…

♪じゃね〜よ!!

「にしても、君は面白いね、俺を視認できるなんてねえ。よし、決めた。君にある能力をあげるよ！」

え、要らねえ…

「そついうの間に合ってるんで…」

「まあ、奥様そつ言わずに…」

さっさとP U D D I N G弁償して帰らないかなあ…？

「君にあげる能力なんだけどねえ…」

要らねえつつてんのに、勝手に説明しだした…

「斯く斯く然々こつという訳でねえ…」

「おい、ちよつと待て！

要らねえし斯く斯く然々しか言つてないし！」

「もう、諦めちゃおうぜ？」

「諦められっ…コレは！？」

奴の目の前に凄まじいオーラを放つ

P U D D I N Gがあつた

今まで遭った中でもトップクラスの戦慄が僕の身体を走った

「くれ…るのか？」

「俺のあげる能力を貰ってくれたらやるよ？」

僕はこの人生でこれ程の選択を迫られたことはあるのだろうか？いや、ない！

「クッ、仕方ない…」

誠に遺憾だが、PUDDINGへの欲望には逆らえない…

「交渉成立だな。これ読んでサインしろ」

何か利用規約の書いた紙を渡されたんだが…

取り敢えず読んでおこう

――30分後――

くれる能力とやらは、あらゆる事象の確率を知ることが出来るらしい例をいうなら確実なデータの天気予報みたいな感じだ

賭けとかで勝利確実じゃね？

僕はサインをして、待ちわびていたPUDDINGを食べているんだが…

「フッフ、掛かったな！」

奴はニヤニヤしながら僕に虫眼鏡と規約書を持ってきた

「利用者は持ち主の衣食住の保証をするって書いてあるんだぜ？
宜しくな切嗣」

え？

僕は虫眼鏡で規約書を見て見ると

確かにあった…

でも詐欺じゃね？

「詐欺？何言ってんだ俺は堕天使だぞ？」

心読んできやがった…

「っつ訳で、宜しく」

♪ じゃねえええええええええええつ!!

S i d e O u t

第弐話 因果応報（前書き）

R15の残酷描写って何処からなんでしょう？

第貳話 因果応報

前回のあらすじ～

利用規約はちゃんと読もう！

S i d e 切 嗣

どういう訳か墮天使（仮）が僕の家に住み着くことになってしまった…

へ？P U D D I N G？食したよ、大変美味であつた！

「おい切嗣、腹減つた！」

コイツは何を抜かしてるんだ？

「さっき、僕のP U D D I N Gを食らつてたじゃないか！？この墮天使（仮）！」

「（仮）！？それとこれとは別だ、規約書にも書いて有つたが？」

クツ！破ったら死にますって書いてあったしなあ…

そうだ！

「クーリングオフを要求する！」

僕は勝ち誇った顔で堕天使（仮）を見る

が

「残念だったな！既にお前は交換条件であるプリンを食ってしまった、故に契約は破棄出来ない！！」

クツ！？ただのイタい電波女じゃなかったのか！？

「お前は結構失礼な奴だな…」

「僕は堕天使（仮）に払う礼儀なんか、持ち合わせていないよ」

仕方がない…

といつても、僕は料理なぞでкинしなあ…

そうだ！コイツにやらせよう！

「衣食住の保証をするとは書いてあつたが、世話をしるとは書いていない！

だから、君が作れ墮天使（笑）！」

「クッ！この俺がたかが人間に命令される羽目になるとは…」

おっ？これはラッキーだ

「僕はPUDDINGを食べたい！」

「仕方がない…作つてやるっ」

— 1 時間後 —

「出来たぞぉ〜切嗣」

z
z
z
...

ん？何だろう？

「おい飯だぞって、寝てたんかい！」

あ？僕は寝てたのか…

昨日の仕事は少々大変だったからなあ

てなことで僕は今、P U D D I N Gを食しているんだけど…

「何コレ……」

「どうした？マズかったのか…？」

バラキエルが不安そうな顔コツチを覗き込んできたが

マズい？ふざけんじゃあない！

「美味っ！何これ美味いんだけど……！3つ星シェフ裸足でエスケー
プなんだけど……！」

賞賛しすぎだ？

全然そんなことはない！

この滑らかな口どけ！

程よい甘さ！

焼き方！

このお方只者じゃない！

「お見それしたよバラキエル……」

「どうだ思い知ったか、切嗣。やっと名前で呼ばれたよ……」ボソッ

何か凄く満足そうだ…

「ところで、お前は何して働いているんだ？」

「掃除屋かな？」

ん？

僕はナイフを懷から取り出し窓の外に投擲する

「な、なんだ！？」

ナイフは窓の外に飛んでいきナニかに突き刺さった

うん、手応え有りだな

「ああ、気にしないでいいよ？僕の命をらって来た取るに足りない雑魚だから。
存在価値としては黒い覆面着けて『イー！』とかいってる奴程度だから」

「お前、あの動きからしてただの掃除屋ではないだろう？」

「いや、僕は社会の賤人（塵）を掃除する立派な掃除屋だよ？
まあ、分かりやすく言うと殺し屋だけどねえ」

あるえ〜？何か変なこといったかなあ？（・3・）

「ククツ、ハハハハ！お前面白いな！」

面白？面白とは何事だ、僕は真面目に働いていると言つのに…

「んで、どんな奴を掃除してるんだ？」

いい質問です！じゃなかった…

「うーん、僕は基本的には依頼されれば誰でも殺すしねえ…」

「ふーん。じゃあいつも通りに仕事しなよ、俺は近くで見てるから」

ハ？何？コイツ付いてくる気なの？

「え、何？翼生えてんのバレたらどうすんの？バカなの？」

「所がどっこい、俺は視えねえ！」

何か自信満々に言い出したよ…

しょうがない、今日の僕の仕事（殺し）に連れてってあげよう…

夜になった…

いい満月だ

あの日のことを思い出す

それは10年前の事であった…

すいません嘘です

第一満月どころか月も見えない程に、空が曇っております。明日は雨ですきつと…

赤の扉も選んでないですよ？

てな訳で依頼ですが、いじめられたからいじめに参加した奴を殺してくれ

だそうです…

自分でやれと言いたいですが僕の仕事なんで行きますかあ

「バラキエル、気が散るから仕事中は僕に話しかけるなよ？」

「あいよ」

お、見つけた見つけた

面倒くさいからすぐに終わらせよう

僕は指に嵌めている指輪から 絃 を放出する

「あいつ、マジウザいよねえ」

「ホント、ホント」

シューッ！

「あれ、なにこれ？首にからまつ…」

ブシュッ！

音を立てて何人かの標的の首を 絃 が切断していき

「咲希？」

ブシュッ

絃 が残っていた標的の首を切断した

「フウ、造作もねえ」

「もう終わりか？」

「いやいや、もう一人いるよ」

僕は依頼者のもとに行き報告をしたあと

シュッ

僕は依頼者（標的）に向けて 絃 を放った

「な、何をする気なの！？代金は払ったでしょう！？」

「人を呪わば穴二つつてね！」

大した理由でもない癖に自分で解決せずに自分は悪くないと、人に責任を全部押し付けて、有ろう事か僕のような殺し屋に依頼したんだ。当然の代価だろう？」

ギギギッ！

「おねが…やめ…」

「君は苦しませて殺してあげるよ」

ギギギッ！

「ギアッ！」

依頼者は 絃 で脚、腕、腹部を徐々に切断されていき
最期は喉と心臓に向けてナイフを投擲され、心臓を破裂させられて
生き絶えた

「こんな、報酬に興味はないよ」

そう言って僕は報酬として払われたお金を
依頼者だったモノに投げつけた…

「バラキエルどうだったかい？」

「ああ、結構面白かったぜ？」

「そうか、じゃあP U D D I N Gでも買って帰るか」

自称“善良”な殺し屋と自称墮天使は、
その場を何事もなかったかのように後にした…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5869v/>

確たるを率ひ紡ぐ者

2011年11月13日13時02分発行